

# 全ての組合員と気持ち一つに

# 国 労 水 戸

国労水戸地方本部  
 水戸市中央1-1-11  
 ENYビル2F  
 029-221-4008  
 発行責任者 塚原良雄  
 編集責任者 坂本公則

## 原ノ町地区を激励オルグする

東日本大震災と福島原発事故から4年が経過しました。被災地では、4年が経過した今でも約12万人もの被災者。応急仮設住宅や借り上げ住宅などで不自由な避難生活を強いられ、震災関連死が今も後を絶たない実態となっています。

震災から時間が経過するほど、被災者の生活にさまざまな困難がのしかかり、被災者から希望を奪っていく事態が今も続いています。国労は毎年開催される「国労フクシマ交流会」で組合員や家族、地域の方々と交流を深め心寄せしています。

職場・地域の活動に自信を持ち、引き続き、組織拡大に全力をあげよう！

## 原子力政策に未来ない

2030年時点の電源構成（エネルギーミックス）を検討している経済産業省の有識者会議が28日開かれ、最適な電源構成（ベーストミックス）について、焦点の原発比率を20〜22%とする同省の原案を示しました。

東京電力福島第1原発事故前への原発固執の姿勢を鮮明し、多数を占める再稼働反対の国民世論を無視するものです。

東日本大震災・福島第1原発事故から4年を経た今も町民全体が避難生活を強いられている被災地の現状を見ると、「原子炉の中心がどうなっているのか、汚染水問題もどう解決するのか分らない」「核のごみ処理方法も決まっていな中で原発を動かせば核のごみがたまるだけ、政府の原子力政策について反省すべきです。原発再稼働の運動をさらに広げましょう。



5月9日、地方本部は原ノ町地区激励オルグを開催しました。一行はいわき駅から常磐自動車道（2015年3月1日全線開通）を利用し現地へ向かいました。車窓から見る風景は、除染で出された黒い袋、空き家周辺は草木が覆い茂り生活感ありません。また、全線で通行可能と

なった常磐自動車道に設置された放射線量モニタ（9箇所）は5〜6μSvを示していました。

交流会は原ノ町市内で行われ、全体で24名が参加し被災状況も含め意見交換を図りました。原ノ町地区の組合員からは、東日本大震災と福島第一原発事故以降、陸の孤島のように生活や仕事面でも意欲が出ない。再雇用でエルダー社員制度を活用したいが、原ノ町地区は働ける所が少ないので早急に改善して欲しい。機関会議へ出席したいが、年齢を増すごとに体力的にもきつい等、数多くの意見が寄せられました。

一方、支部・分会代表者の参加者からの声は、初めて現地を見たが、人のいない町・誰も住んでいない居住を見たときに、改めて原発事故の恐怖を実感した。安倍政権が進めようとしている、原発再稼働は納得できない。この運動が出来るのは国労しかない。「国労フクシマ」の運動と継続を更に強化し、脱原発・反原発の闘いを全国へ発信することが重要と再認識したとの意見が出されました。

今後、地方本部は今交流会で出された意見を基に、引き続き取り組み継続を図りながら、地方本部全体で気持ちを一つにすることが重要と感じました。直接肌で触れ、見ることでマスクも報道されている現実とは違う面も確認できました。今回の企画を通じ、更に職場や地域へ広げ運動を強化するようお願い致します。

（文責 赤沼）